

「図書館サービスと建築の相関」に掲載のうち、下記について全文を
SHOSHO ISHIKAWA でご覧になれます

著者：嘉門 佳顕

表題：整備の調整役が考えたこと

頁：58ページから83ページまで

1 はじめに—調整役という仕事

本稿は、石川県立図書館（以下「当館」）の整備に従事した一担当者がその過程で考えたことを振り返りながら、当館をつくる上で何を調整し、どんな思いを込めたかを綴ったメモである。

私は平成28年度の新石川県立図書館基本構想（以下「基本構想」）の策定から、令和4年度の開館まで約6年半、石川県（以下「県」）の行政職として¹⁾、当館の整備に従事した。大学時代に建築を学び、卒業後は建築家の設計事務所に勤務した経験もある²⁾ことから、主にハード面全般の計画と整備を担当した。具体的には建築、家具、サイン、展示のそれぞれについて、計画から完成まで発注者として監修することだ。設計者や営繕課の技術職員、施工者、図書館の運営チームなど、多くの関係者の間を取り持ちながら、個々の与件を調整し、一つの形に結実させるべく尽力した。

その過程は、何ひとつ一筋縄でいかないといっても過言ではないくらい、紆余曲折の連続であった。「いい図書館とは」/「これからの公共建築とは」。大きなテーマに向き合いながら、眼前にある山のような個別具体の検討項目に向き合う日々だった。

基本構想から一貫して、多くの県民が気楽に訪れ、活気に溢れる図書館になることを目指した。結果として、書斎のようでもあり、公園のようでもあり、美術館や博物館のようでもあり、また劇場でもあるような図書館になった。

陰では、私だけでなく、多くの調整役が人知れず動いている。公共建築が生まれる実務にはこんな仕事もあるのかと、気づきがあれば幸いである。

なお、本稿は当館を実際にご覧になっていることを前提として書いている。概要についても、当館のホームページ³⁾や建築誌等で発信している⁴⁾ので割愛する。ご容赦願いたい。（末尾に、2022年9月に当館の紹介として書いた拙文を付したので、適宜参照されたい。）

2 調整役とは

2.1 調整役の出番は増えていく

図書館に求められる機能やサービスは、技術の進展と相まって、どんどん多岐に渡っている。従来の図書の収集や貸出に加えて、「サードプレイス」の居場所とし

て期待されるようになって久しい。交流を促すイベントの企画やデジタルアーカイブの提供など、サービスも多角化する一方である。伴って、建築が考慮すべき機能と件も複雑化し、仕様も専門性を増す。比例して、整備に従事する関係者の種類と人数も増える。

具体例をあげよう。今回、図書検索や貸出し手続きなどを来館者自身で行えるよう自動化することに伴い、「セルフステーション」という機器端末が載る台を製作することにした。小さな端末台にすぎないが、来館者のだれもが触れる身近な存在である。建築との意匠上の調和を図りつつ、利便性も高いものに仕上げたい思いからだ。

いざ着手してみると、家具デザイナー、製作者、システムベンダーのみならず、建築工事施工者、電気工事施工者、サインデザイナー、バリアフリー推進工房など、20名以上もの関係者が関わり、調整は困難を極めた。ICタグを正確に読み取るための実証実験も含め、構想から実現まで約2年を要した。たいへんな道のりだったが、調整役としてのやりがいを実感した。

機能が高度化するということは、仕事も細分化され、機構全体を成立させる「歯車」の数が増えるということでもある。大きな歯車どうしがかみ合わなかったり、きしんだりすることが頻繁に発生する。調整役とはさしずめ、歯車の間に入り込んで、滑らかに回るように施す潤滑油だ。目に見えない存在だが、大きな機構を動かすほど、必要不可欠になってくる。

2.2 二律背反を超え、両者共存を図る

心に残る象徴的な空間を生み出したい一方で、図書館の主役は本である。建築だけが先走り、図書館が提供するサービスに支障をきたすようなものを残すわけにはいかない。

しかし、これから詳述するように、図書館において、空間としての魅力と機能性は、やっかいなことに、ことごとく対立する。たとえば日光の扱い。日射は本を傷める。しかし、光がなければ文字を読むことはできない。日中から人工照明に頼りすぎるのは環境に負荷がかかる。外に対して開けるのか、閉じるのか。図書館を成り立たせる上で、そのような二律背反する例は枚挙にいとまがない。

いずれかを諦めるのは簡単だが、それでは効果半減だし、調整役の仕事としても敗北だ⁵⁾。安易な折衷は凡庸に陥り、虻蜂取らずの誰も得をしないことになるので避けたい。

美しい調整とは、理想と現実を行き来しながら、関係者の合意形成をはかり、全員が納得するベストな状態へと導くことである。そのためにただひたすら、二律背反を超え、両者が価値を棄損することなく共存できるよう、繰り返し模索するしかない。

2.3 「ラストワンマイル」が建築の質を決める

調整役は、常に現場の渦中に身をおき、コミュニケーションがしやすい状況をつくるよう心がけなくてはならない。会議で問題が提出されてから対処するのでは遅い。たとえば現場での施工者との何気ないやりとり。何が決まらなくて困っているか。彼らが言いづらいことがあれば、代わりに働きかけ、動かせることはないか。先々の懸念を事前に察知できるよう、できるだけ現場にいて、「ちょっといいですか」と声をかけてもらいやすいようにすることが肝要だ。この小さなやりとりの積み重ねがお互いの信頼へとつながる。気づくのが早いほど、講じうる対策の選択肢も広がる。

図書館の運営を担う司書と対話を重ね、何が心配かをできるだけ洗い出す。まだ見ぬ来館者の目線で、快適に、便利に利用するには何が欠けているか想像する⁶⁾。来館者、運営者、発注者、設計者、施工者。五つの視点の五角形を行ったり来たりしながら、デザインを都度見直し、形の着地点を見出していく。小さな課題を放置せず、関係者全員で知恵をしぼり、一つ一つ対処する。コミュニケーションを怠り、課題を放置すれば、あとで必ず顕在化して深刻な事態を招く。毎日が気が抜けない真剣勝負だ。

耳あたりのよい一つの「デザインコンセプト」から演繹的にできるほど、現実には生易しくはない⁷⁾。完成までの道のりは、泥臭く、地道な作業の積み重ねでしかない。それぞれの立場で、プロフェッショナルとしての意向がある。公共図書館の質は、関係者で喧々諤々意見を出しながら、現場で検証し、一つの結論を絞り出す「ラストワンマイルの調整」で決まる。今回、それを痛感した。そして、必ず突破口があることも。

3 図書館の可能性／建築の可能性

図書館はまだまだ可能性がある。同時に、図書館を成り立たせる上で、建築の関わらせ方の難しさも知った。

3.1 デジタル化が進むほど、図書館は求められる

時代は変われども、古今東西、図書館がなくなったことはない。図書館の可能性はこれからむしろ大きくなる。そう信じている。

今日、あらゆる情報がデジタル化・クラウド化され、仮想現実へのシフトも進んでいる。だからといって「図書館が不要になる」と決めるのは早計だ。デジタルの世界とリアルな世界の関係は、そのような単純な代替ではなかろう。

デジタル化が顕著に進む音楽市場では、ストリーミングによる音楽配信によって、より手軽に接触できるようになった。歩調を合わせるように、音楽をリアルに体感し、共に分かち合う場としてのライブ市場も活性化された⁸⁾。流動化を促すデジタル技術は、反作用としてリアルな場へのさらなる欲求を生む。そして片方の振幅がよ

り広がれば、他方も応じるように広がり、バランスをとる。

本との時間も、同様に価値を持つはずだ。人びとは時空をまたいで交信し、さまざまな情報にアクセスしやすくなった。一方で、世界の断片しか見えず、ときに翻弄され、何が自分にとって本当に必要か分かりづらくなった。その分、私たちは身近なつながりをより強固にして、コミュニティを育み、共感できる何かを探しつづけている。

本の価値は、中身の情報だけではない。ページの重み、紙の質感、時を刻んだ香り、装丁に込められた思い。さまざまな情報を、私たちは意識せずとも立体的に読み取っている。本の並べ方次第で、さまざまな小世界をつくることができる。本が伝えるものは、発見的で、かつ深い。

建築もまたしかり。オンラインでのコミュニケーションが普通になればなるほど、「いま、同じ時間に、この場所にいる」ことはより特別な意味を持つ。友人と談笑したり、オフィス代わりに利用したり、家のようにリラックスしたり。限られた人生の時間の中で、どの場所を選ぶか。建築への期待が、より大きくなっている。

公共図書館の数は今もなお、増え続けている⁹⁾。蔵書の中を歩き、一冊の本を見つける喜び。同じ場に集い、好奇心が刺激される楽しさ。「ここ」に来たからこそその実体験のかけがえのなさを、今ほど人びとが実感している時代はなかろう。だれもが何度でも「来てよかった」と感じる図書館が、ますます求められている。

3.2 建築は見た目の話題のためにあるのか

先行事例の調査として、たくさんの図書館にヒアリングに伺った¹⁰⁾。うちいくつかの図書館は、個性的な建築で、雑誌にも取り上げられる話題のものだった。それらのほとんどは、運営側と大きな溝があることが分かった。「運営のことを考えない設計者の暴挙でこの図書館ができた」という、不満や苦労話を聞いた。建築を学んだ身として、この現実にはショックだった。建築に一時の話題性しか期待しなかった浅薄な発注者の責任も重い。

運営と信頼関係がない図書館は、本が生き生きしていない。造形的な館内を巡っても、物足りない。せっかくの大きなガラスも、本を守るためにブラインドが下がりっぱなし。そんなアンビバレントな状況は本にも来館者にも、不幸でしかない。引き渡される側、運営者をないがしろにしては、建築としても、幸せにならない。そうはなるまいと、心に決めた。

3.3 機能と自由

とはいえ、くだんの設計者だって、運営と初めから揉めたいわけではなかったはずだ¹¹⁾。建築の力を引き出し、新しい可能性を追求したからこそだと信じたい。

本を探す場所、読む場所。来館者の行動を画一的に想定し、場所ごとに行為を規定し、割り振る。それからはみ出さないように、禁則ルールで縛る。管理を優先し

た四角四面な図書館もまた、校則の厳しい学校のように堅苦しく、行動の自由がない。

運営が疎外されない機能性を有しながらも、自由で居心地のよい建築は共存できないか。大きなテーマに、立ち向かう必要がある。

3.4 人が集まる公共性

基本構想の策定時から、「多くの県民がくるようにすること」が至上命題とされた。裾野の広い公共性の獲得である。普段図書館に行かない人も、足を運ぶようにしなければ、規模を大きくし、移転・新築する意味がない。

全国的な統計によると¹²⁾、図書館に行く人は4割。残りの6割の人が訪れるようにするには、標準的な図書館から脱却しなくてはいけない。そのためにも、公共建築の本来的な力に頼らねばなるまい。それは長きにわたって人びとを惹きつけ、地域住民が同じ時間と場所を共有することで、この地への愛着を育む力ではなかろうか。建築に求めることとして、基本構想にこの点は何としても記述しておきたかった。

3.5 図書館は、日常のためにある

当館は、観光のための施設ではない。日常的な利用に供する県民のための施設である。家の延長に、図書館の公共性はある。毎日来ても発見があり、心地がいい居場所として、当館の恩恵を最も享受するのは、県民でなければならない。当たり前なことだが、浮足立つことはないように自らを戒めた。一過性のインパクトは、求めない。「この図書館がある石川県民がうらやましい」。観光で訪れた方に、そう感じてもらえるような図書館にしたかった。

4 建築たらしめるために：空間と機能の両立にむけて

私は建築論を語る能力もないし、立場にもない。重々承知の上だが、建築の可能性を信じつつも、行政側から図書館をつくる実務に携わった身として、ぶつかった壁と、それを乗り越えるためにどうもがいたか、記したい。

4.1 建築への信頼

計画を進めるにつれ、まず感じたことは、一般的ではない形状をした建築、いわゆる「斬新な」建築（以下「斬新建築」）への不安と警戒心である。世間一般に、斬新建築に対して、風当たりは厳しい。街に突如として異様なものができる。使いやすさを無視して、個人の表現を行う。そんな印象を持たれている。津々浦々、信頼を失った「トラウマ」の例に事欠かない。昨今、個々にいろいろな事情はあれど、老朽化した昭和の「名作」は、どんなに外部の有識者が保存を呼びかけたとして、次々壊されている。そのあとにできる建物はたいてい、四角い一般的な形状をして

いる。自分の街に、日々使う施設に、あんなインパクトはもう求めない。そんな意志表示であるかのように。

危機感を持った。建築は、使いづらくなければいい。これは、存在を消すこと、つまり建築そのものに関心や期待がないことと同じだ。そして、そこからはみ出せば、「建築が暴走した」とみなされる。

なぜこうなってしまったのか。公共建築は本来、人びとから期待され、住民全員のものとして、何世代にも渡って、街の核となる存在のはずだ。つくっても50年程度しか存続しない状況は、あまりにも哀しい。

つくる過程において、信頼関係を構築しないコミュニケーションの不全もまた、事態を悪化させている。専門家や愛好家が「価値をわかって」と外から指摘するだけでは、平行線のままだ。公共建築への期待と信頼を回復する。そのためにも、調整役は、地域に優しく根を張り、共感を得られるような建築を目指して、一汗かかなくてはいけない。静かに、じわりと感動を与える息の長い図書館をつくりたい。地域から愛され続けている図書館建築もまた、世界中に存在する。希望は、あるはずだ。

4.2 建築は機械なのか

斬新建築に必ずついてまわる批判、「使いづらい建築」は、問答無用で悪とされる。それは、建築が「機械」である側面を持つからだ。私たちの生活は、電話であれ、冷蔵庫であれ、車であれ、ユーザーの思考を先回りしてくれるスマートな機械に取り囲まれ、すこぶる便利になった。アップデートによって、ぼんやり感じていたストレスが勝手になくなっていくのも日常茶飯事だ。比べて、建築の進化は、どうしても鈍重に映る（そもそも、現代ではもはや造ることのできない古建築もあるわけで、進化という概念が通用するのか、疑わしい）。環境負荷も大きい代物だし、肩身は狭くなる一方だ。

公共図書館はどう使われるか。本を探す、借りる、読む。試験勉強をする。講習会を受ける。トイレが近くにある。その個々に対して、なるべく最良の性能を与える。そうすれば「使いづらくはない建築」にはなろう。「機能」にまず目を向ける。さすれば、機械的な建築としては及第する。

それで十分なのか。疑問が湧いてくる。私たちは図書館に行くとき、電話を使うときのように、いつも明快な目的を持っているだろうか。あるいは、目的を持っていなければ、行く意味はないのだろうか。「なんとなく、ここにいたい」と思う場所。これも、建築だから提供できる価値ではないのか。

建築が対象とする行為は、幅広い。単一の動詞で記述しきれない¹³⁾、大きな「受け皿」である。人によって、あるいは同じ者でも日によって、「何がしたいか」も変わる。公共であれば、輪をかけて複雑になる。使われ方が千差万別だとしたら、「機械」は、どう設計されるべきなのか。

4.3 機能主義

私たちは、「機能」という言葉をつかうとき、ある要素を周りから切り出して、それを単独で評価している。たとえば、本棚¹⁴⁾の機能は、収蔵冊数、耐荷重などの要素を切り出し、それぞれのスペックを確認する。その数値が高度化すれば「進化した」という。広さ、明るさ、強度、使い勝手、経済性など、設計の打合せでは、これらの機能が与件を満たしているか点検することが主軸となる。いわゆる「機能主義」というやつだ。共通の「ものさし」があるので、だれにとっても理解しやすいし、協議ははかどる。合意形成を図る上でも、機能主義で会話することは基本だ¹⁵⁾。

4.4 機能の限界

ただ、機能主義は万能ではない。要素を切り出すということは、前後の関係を大胆に無視することでもあるからだ。たとえば、本棚の一段の高さ。段数を変えずにより大きなサイズの本を入れられるようにすると、全体は高くなる。上方の棚の本は取りにくくなるし、見通しも悪くなる。管理上、別の支障をきたすことになる¹⁶⁾。機能間で、二律背反が起こる。

特定の機能を高めることに邁進すると、枠組みからはみだした機能は疎外される。機能主義は、全体をフォローできない。つまり、総合的にはだれもが満足するものに、なりえない。そこに機能主義の限界がある。

各機能を高めることは、大事なことである。さりとて、すべての機能を満たすこともまた不可能だ。互いに調整し、折り合いがつく着地点を見出していかななくてはいけない。整備において難しく、かつやりがいがあるのは、そこだ。

4.5 「居心地」は機能か

さらに、すべての価値を機能で語ることはできないわけではない。たとえば、「居心地」。居心地がわるい図書館は、歓迎されない。しかし、これを機能の言語に落とし込むのは難しい。「ずっとその場にいたい」という気分は、明るさや温度はもちろん、天井の高さ、視線の抜け、家具の肌触り、混雑の度合いなど、様々な因子が絡み合っている環境への反応である。居心地のいい空間をつくるには、どれか特定の因子を切り出し、それを高めるだけではなく、総合的な見地から、塩梅を調整しながら組みあげていく必要がある。

4.6 機能から導かれる形：「標準形」

機能を頼りに形を決めてもすべてを満たせない。ではどうやって形を決めればいいのか。私が整備の過程で、最も腐心したテーマだ。機能と、建築がつくる地形はどうやって折り合いをつけるべきなのか、その呼応のあり方である。

「図書館」と聞いて、多くの人が思い浮かべる汎用的な形がある。四角形で、い

くつかの部屋に分かれ、閲覧室には本棚が規則正しく整列し、間に机と椅子が配置されている。それを「標準形」と呼ぶことにしよう。

標準形は、求める機能から素直に導かれた合理的な形状をしている。部屋の広さ、本の収蔵可能冊数、配架計画との整合、来館者と管理者の動線の区別、バックヤードとの接続のしやすさ、閲覧席の数。調整すべき事項は予め細分化して整理され、パラメーターに還元される。それらを個々に点検していけば、計画は進む。

本の採しやすさを追求する上では、本棚は整然とまっすぐ連続することが望ましい。一方で、そこにはお目当ての本をみつけたらその場を去らなくてはならないような緊張感が漂う。合目的的に効率を追求した場合は、その目的を持たない者の所在をつくらない。

4.7 標準形は行為を限定する

「多くの人が訪れる。普段図書館を利用しない人も足を運ぶ」という与件は、どう機能に還元できるのか。標準形の各機能の調整によって満たしうるものなのか。どうしても、行き詰まる。

標準形で想定される来館者は、普段から本を読み、本を借りにくる層や、自習のため来る層に限られる。来館者も標準化され、そこからはみ出す者は疎外され、図書館に行きづらい。

4.8 機能が先か、行為が先か。「原形」に、立ち戻る

多くの人が利用する図書館の形のありかたを探るには、もう少し本と人、空間と人の行為との関係を、原点に立ち返って考えた方がよさそうだ。いわば「原形」の模索である。

ある特定の利用が決められた部屋があって、入ってはじめてその行為が許されるという順番が、そもそも不自由だ。空間の形が、おのずとある行為を導く方が自然だ。たとえば、私たちは森を歩くとき、道端に切り株があればそこに腰を下ろす。川辺では橋の下に佇み、屋根裏を見つけたら寝転がりたくなる。これらは、その行為のためにつくられた場所ではない。木を伐採する、川を渡る、雨露をしのぐ。もともと別の目的があって、存在している。あるとき、付随して新たな行為が自然発生する。しかも、実にしっくりと。行為を誘発し、人の居場所をつくるのは、機能ではなく、その場の地形なのだ。その場所がつくられた目的のための機能（機械的な面）と、居場所としての魅力（空間の地形）を、一度切り離して考えてもいいのかもしれない。図書館の原型は、その先にありそうだ。

4.9 「余白」の場所

ある空間における機能と行為は、かならずしも一対一で対応しない。そう仮定してみる。

家の間取りを考えると、部屋に名称を決めることで、いつのまにか行為も一意で決定されているかのように錯覚しがちだ。「ダイニング」では食事、「寝室」で

は睡眠というように。それゆえ、リビングのソファで寝ることは、「だらしない」。

他方、ひと昔前の街や住宅には、行為を規定していない日常的な場所¹⁷⁾があった。いわば「余白」である。たとえば「井戸端」や「縁側」、「土間」、そして「窓辺」のように。

これらの名称は、その場所で行われる行為に由来しない。だからといって、必要ない場所ではない。むしろ身近で、当たり前前に存在し、親しみとともに受け継がれてきた普遍的な場だ。窓辺で本を読んだり、うたた寝をする行為は昔からずっと行われてきたし、これからも変わらずにあるだろう。

4.10 井戸＋端＋会議：余白が行為の起点になる

「井戸端会議」は、興味深い言葉だ。機能と行為が対応していない。「井戸」と「端」と「会議」の3つの要素からなるが、計画する段階では「井戸」としか図面には記されていないからだろう。水を汲むために、毎日人は集まる（目的）。人が並ぶことが想定されるから、井戸の脇には名もなき場所を設ける（「端」）。手持無沙汰な人たちは「会議」を始める（行為）。水を汲まずとも、買い物帰りに寄り道して「会議」に加わった人もいだろう（そして会議室で行われる会議よりも、赤裸々な情報交換がなされていたはずだ）。

井戸の機能は、技術の助けをかりて、労力をかけず、より効率的に達成される方が望ましい。径や深さは、水の汲み上げやすさを考慮して、機械的に設計されるべきだ。

さて、「端」で起こる貴重な情報交換こそが、この場を生き生きとさせている行為であるにも関わらず、計画段階では「余白」でしかない。特定の目的のために作られた場所が、その機能とは別の行為を導く関係が、井戸端にはある。

井戸を「本棚」、会議を「閲覧、あるいは交流」と捉えなおせば、人が集まる図書館の計画は、「端」のあり方がデザインの中心になる。そして、その場所は標準形が求める機能的なスペック（たとえば、本の探しやすさ）からは解放され、本と閲覧（あるいは交流）をシームレスにつなぎ、より幅広い行為を誘発するよう、場所の魅力を高めることに専念できる。井戸端に大きな木と、その下に心地いいベンチやハンモックがあれば、待ち時間も憩いの時間になるように。

4.11 2つの機能を並走させ、余白を活かす

その場所が果たすべき目的に加えて、自然に発生する行為を近傍にある余白が受け止める。空間と行為の幸せな関係とは、そのような余白が介在した場所なのではないか。余白は空間に潤いを与える。

しかし、機能を細分化し、各所でそれぞれの機能を満たすように全体を組み上げていくアプローチでは、「余白＝無駄」として排除されてしまう。大都会の通路には、座るところが少なく、移動する行為しか許されない。余白がない場所では、人間も機械になるしかない。空間には緊張感が漂い、殺伐とする。

では、同じ場所で2つの機能を重ね合わせるの、どうか。

4.12 変容の面白さ：閲覧室になった小学校の廊下

京都国際マンガミュージアムの廊下に、具体的なヒントがあった。同ミュージアムは、京都市と京都精華大の共同事業によるマンガに関する資料収集や研究・展示のための博物館機能と図書館機能を備えた文化施設で、建物は昭和初期建造の元・龍池小学校校舎を改修・増築したものだ。収集されたマンガ資料のうち約5万冊が開架され、来館者は手に取って館内の好きな場所で閲覧できる。

かつての校舎は3階建て、片廊下型の標準形の教室配置で、懐かしい雰囲気が漂う。その1階から3階までの廊下の壁面に、めいっぱい本棚が配置され、ずらっとマンガが並ぶ。かつての廊下が、立体的な管のような閲覧空間になっている。小学校に、マンガが寄生した格好だ。「学校で、マンガが読めたなら」。多くの児童がかつて夢に見たことが、現実になっている。

廊下に本棚が加えられ、閲覧という新たな文脈が重なる。さらに、廊下に突き出たコンクリートの柱間の小さなスペースに椅子が置かれ、閲覧ブースになっている。本棚をながめ、気になった1冊を手に取り、その場で読むという一連の行為が、廊下の中で完結する。主要動線だから、人は常に流れてくる。移動する人、立ち止まり本棚を眺める人、読む人が適度に混在している。目的と行為の一对一对応からはつukれない、重層的な空間だ。

ほかの場所も、心地よい。児童のためにつくられた勾配がゆるやかで幅の広いタイル貼りの階段は、静かなたまり場になっている。人工芝が敷かれたかつての運動場では、ソメイヨシノの木漏れ日の下、散らばりながら弁当を広げ、気ままにマンガを楽しんでいる。

小学校としてつくられた空間が、本棚が加わることで「変容」し、はじめから図書館としてつくられた空間よりも魅力的な閲覧空間になる。異なる文脈の重ね合わせは、ひとつの機能から導くまじめな計画よりも、自由に豊かな空間を生み出すことがある。

5 石川県立図書館の建築

当館も、計画当初から使い勝手の悪い斬新建築になるのではないかと不安がられていた。設計に着手した段階で、運営の意向や懸念も踏まえつつ、案を最初から練りなおしてもらった。平面も立面も、関係者の合意が得られる案になるまで、何案も検討した¹⁸⁾。

5.1 円形への挑戦

円形に本棚がならぶ、「円形の図書館」は日本に数えるほどしかない。なぜか。本も本棚も四角い。蔵書の管理という観点からは、円形の本棚¹⁹⁾は座りが悪く、非

効率だ。手の届かない高さに本を置くという、「インテリアの素材」として扱うことへの心理的抵抗も根強い。さらに、閉じた円は閉塞感があることに加え、移動しても景色に変化がなく、単調だ。円形を排除する合理的な理由はどんどん出てくる。

5.2 求心力と象徴性

それでも、当館は円形に本棚が並ぶ閲覧エリアに挑戦した。図書館の平面計画において、円形は歴史的に繰り返し用いられてきた形式だ。人が集う中心をつくり、空間に象徴性が生まれる。図書館ならではの圧倒的な蔵書の一望性も獲得できる。機能を超えた、地形としての捨てがたい魅力が、円形にはある。

5.3 包まれることと、抜けることの両立

長短を踏まえた円形のありかたを模索する中で、あるとき、設計者から2つの段状の半円が、上下にずれて向かい合うという断面構成が提案された。皆が「これだ」となった。この立体的な構成であれば、本に包まれる体験と、視線が抜ける開放感を両立できる。さらに、高いところと低いところ、空間に抑揚が生まれ、段状書架の裏側の空間にもバリエーションができる。

5.4 遠心力を受け止める矩形

来館者の多くは、まず1階の中心、吹抜けの下に立ち、上を見上げる。その後、スロープを巡りながら上階に登っていく。中心から、外へ。遠心力が働いているかのようだ。

最終的に外観は、矩形の輪郭をつくる列柱から、ひだ状に外壁パネルと窓ガラスが交互にはみ出す形状になった。日射から本を守りつつ、適度に日光を内部に取り入れるという、外壁としての役割から導かれた配置だ。結果として、小さな三角形の窓辺、余白ができた。この余白はやがて、人が集う中心からもっとも遠いところで、一人になりたい人を受け止める書斎に変容する。

外観もさまざまな案を検討したが、外からの見た目だけの良し悪しではなく、外との関係に起因したデザインが、豊かな内部空間をつくる²⁰⁾現在の案が、最も魅力的に思えた。求心力と遠心力が同時に存在する振れ幅の大きな空間構成は、多様な行為を受け止める寛容な器になるだろう。この窓辺の余白は、大事にとっておかななくてはならない。

5.5 散策路としての閲覧エリア

上のような大きな空間構成によってできた当館の空間は、一つ屋根の下、基本的にどこもが流動的な回遊動線になった。立体的な建築の地形は、自由に動き回って楽しい路地空間を生み出すことに徹する。その方が、仙田満氏の「遊環構造」の良さを活かせるし、動きがあった方が、当館が目指す「思いもよらない本との出会い」も活性化される²¹⁾。

特定の目的のための閉じた「部屋」は4種類しかない。研修室とモノづくり体験スペース、サイレントルーム、グループ活動室などの個室である。それ以外は、大きなワンルームで、さまざまな動線が張り巡らされている。吹抜けを取り囲む、幾重にも連なった円形書架の空間（以下「円形空間」）、2階・3階の主要動線である「大通り」、窓辺の外周部の通路、中心から同心円状に何重にも「散策路」が巡っている。

5.6 本を愛でる散策路

散策路に、花が咲いていると楽しい。図書館においては、本が「花」である。通り沿いには本棚が連なり、司書によってコーディネートされた色とりどりの多彩な本の表紙が語りかけてくる。

いわゆる「閲覧室」も、当館にはない。「止まり木」としての椅子は、通路脇の各所に配置されている。歩き周り、気になった本を手にとって、脇に腰をかけて読む。京都国際マンガミュージアムのように、一連の行為がなめらかに誘発される。

5.7 「変容」を組み込む

現場で躯体が建ちあがっていくにつれ、私は不思議な感覚になっていった。新築でありながら、改修をしているような気になったのだ。並行して、家具計画や展示設計も大詰めを迎えていた。ダイナミックな空間の地形によって、来館者は動き回りたくなるだろう。やがてそこに本棚が並び、家具が置かれれば、路地空間は変容し、ただの通路ではなく、閲覧空間になる。

設計案を説明するとき、「円形劇場のような図書館」という言葉が使われた。厳密には劇場になる寸法体系ではないものの、劇場を図書館に改修したような、二重の機能を重ね合わせたところに、当館の建築の特徴はあるように思う²²⁾。

5.8 動的かつ静的な閲覧席

結果、通路であり閲覧空間でもある場所があちらこちらに生まれた。

- ・**円形空間の通路**：上下階をスロープでつなげる動線。本を眺めるうちに、1階からいつのまにか3階にたどり着いていた、という来館者も珍しくない。通路幅に予め余裕を持たせておいたことで、脇にはさまざまな形状のソファや椅子が並んだ。高い本棚の裏には囲まれたブース席も設えた。館内を行き交う人と留まる人が混在する、エネルギーが公共空間である。
- ・**窓辺の閲覧席**：日射を考慮しながらひだ状に配置された外壁パネルがつくる三角形の余白は、多彩な家具によって個々に特徴があるパーソナルな書斎になった。外の風景を眺めながら、一人で、あるいは身近な者と一緒に過ごす、静かな公共空間である。外壁沿いの書架には主に専門雑誌が配架されている。
- ・**ブリッジ（3階）**：吹抜けの上部で東西エリアを結ぶショートカット動線であり、館内を見渡すビューポイントでもある。さらに、ゆったりとしたソファに腰かけ、洋書の美術本を閲覧できるラウンジでもある。

- ・ **リング（4階）**：約160mの回廊型の館内を見渡す通路は、天井が低い屋根裏のような空間で、片側の壁は「本の歴史を巡る」テーマに基づいて選書された古今東西の本で埋め尽くされている。ところどころ、身を寄せる小さな個席があり、朝から取り合いになるほどのひそかな人気スポットだ。平面的には、円形空間のエリアと、整然と本棚が並ぶ各階のフラットな閲覧エリアとの境界に位置し、「結界」の役割も果たす²³⁾。

5.9 地形・余白・共存

以上をまとめれば、次のようになる。まず建築の大きな架構が、人の集うダイナミックな吹抜けから一人のための窓辺の小さなスペースまで、さまざまな行為を受け止める。同時に開放感のある立体的な構成が、個々の場所を行き来する回遊性を生む。そこに本棚や家具が追補的に加わり、図書館としての機能が重なることで、余白を起点としてさまざまな居場所ができ、複数の行為が共存する生き生きとした場がつくられる。整備の過程でそのように整理できたとき、「図書館の原形」への道が開けた気がした。

5.10 空間と呼応した配架計画の工夫

このつくり方が図書館として成立したのは、ハード面の調整だけによるものではない。実現のためには、標準形ではない地形に対して、配架計画がどう折り合いをつけるのか。その克服には、運営側の涙ぐましい配架上の工夫があったことも、強調しておきたい。結果、円形空間は「本と出会う12のテーマ」によって、空間構成と呼応した独自の配架計画が考案され、「本を愛でる散策路」は生命力を得た。

5.11 「図書館」を成立させる三種の神器：家具・サインそして展示

建築が動的な地形を生むことに徹した以上、図書館としての機能の充足が中途半端にならないようにしっかり手当をするべく、家具、サイン、展示の3つの計画に対して、それぞれプロフェッショナルを立て、主管課である県の文化振興課が委託契約を直接結ぶ体制とした。家具は川上デザインルーム、サインは廣村デザイン事務所、展示はトータルメディア開発研究所が担当した。当館を「図書館」にした立役者たちだ。

5.12 「バイパス契約」のメリット

主管課との直接契約によって、発注者、施工者、それぞれのデザイナーが三角形で結ばれ、循環的なコミュニケーションができるようになった。いわば、「バイパス契約」である。このおかげで、生産性が飛躍的に高まり、かつ調整も効率的に進んだ。

主なメリット2点ある。一つは、それぞれのデザイナーの思いを私が直接聞けるようになったことで、彼らの意図を汲み取り、可能性を高めた状態のまま、発注者として場を調整できること。もう一つは、家具、サイン、展示それぞれについて全

体を司るプロが関与することで、図書館の体験の質や利便性が一気に向上したことである。

5.13 家具とサインの重要さ

後者について、補足する。一般的に、家具やサインのデザイナーは建築設計者の協力会社という立場で関与する。その場合、建築工事に含まれない類のもの、つまり「備品」として扱われる家具やサインは、関与する範疇から外れる²⁴⁾。

そのため、その道のプロではない事務方の担当が平凡な標準形の家具を機械的に選定し、サインはサインにもならない掲出物を図書館スタッフが自前で制作する羽目になる。それぞれの負担も大きい上に、効果が低い。結果、建築は立派でも家具がおぎなりのチグハグな空間が出来上がる。掲出物は壁という壁に入り乱れ、とどのつまり、来館者には何も伝わらない。だれも幸せにしないこの状況は、個人の能力に責があるのではない。発注のルールに起因する構造的課題だ。

家具もサインも、図書館全体に染み渡り、来館者の利便性や快適性に影響を与える重要なアイテムだ。にもかかわらず、両者は公共建築の整備においてまだまだ過小評価されている。家具は人に寄り添い、直接的に行為を支え、本との時間を豊かにする²⁵⁾。サインは、来館者の目的や興味に応じてストレスなく、スムーズに導く静かな水先案内人だ。両者の可能性を活かせば、場が整い、図書館として純度が増す。ノイズのない心地よい空間で、来館者の視線はより本へと向かう。

整備全体の予算からすれば、両者の割合は数%にすぎない。ここへの注力で得られる効果は絶大だ。費用対効果がすこぶる高い²⁶⁾。家具とサインのバイパス契約は、図書館の質を高める有効な手段である。お勧めしたい。

5.14 司書の思いを具現化した展示

展示は、司書の思いを形にするプロとして貢献した²⁷⁾。来館者の目線で、「本との出会い」を演出する棚づくりを高い解像度で実現した。

図書館が展示設計を委託した例は他に聞かない。しかし、一般的に建築設計では、分類ごとに並べる本の冊数が決まれば、それを満たす本棚を所定の場所にレイアウトするまでが精一杯だ。本棚の中身の作り込みにまで、踏み込む余裕はない。

設計が進むにつれ、司書と一緒にあって、当館の蓄積してきた知の厚みを分かりやすく垣間見せ、本の世界に没入できる仕掛けをじっくりつくるプロの必要性を感じるようになっていった。建築が迫力のある形で来館者を魅了するなら、同じだけの労力をかけて、目の前の小さな仕掛けも作りこまなくてはならない。本の並びに興味がいけない図書館になっては片手落ちだ。

トータルメディア開発研究所は、われわれに美術館や博物館における展示のセオリーを押し付けることはしなかった。ゼロベースで司書たちと正面から向き合い、思いを引き出すことに注力した。数年に及ぶワークショップのような定例会議が繰り返し行われた。石川の伝統や文化、生物多様性について、現地にくまなく足を運

びながら理解を深め、どう展示を組み立てるか検討した。よき司書の伴走者となり、一つ一つの棚は共に作り込まれていった。

司書の思いが込められた本棚は、図書館の生命力の源だ。本が生き生きと語りかけてくる。当館の1階の中心地にある「本の出会いの窓」や「里の恵み・文化の香り～石川コレクション～」に並ぶ展示や本に、来館者が何気なく手を伸ばす光景をみると、とてもうれしい。

6 図書館をつくるということ

6.1 公共図書館は、全員でつくるもの

「これは自分がつくった図書館だ。」胸をはって、そう言う人が多いほど、幸せな図書館だ。整備に際して、本当に数多くの人が尽力した。たとえば、施工者の尽力も大きい。「100年以上もつ建物にしないではいけませんから」。現場を司った清水建設の亀井優さんはそうおっしゃった。なんと頼もしいことか。発注者の要望をくみ取りつつ、限られた予算・工事期間の中で、最適な技術的解法を都度示し、着実に具現化してくれた。現場に入る一人一人の職人たちも、真夏でも真冬でも、必死に工事をしてくれた。システムを構築してくれた人、引っ越しをしてくれた人、資料集めを手伝ってくれた人。ほかにも挙げればきりが無い。どの仕事も欠けても開館はできなかった。

当館の整備に従事した方々に敬意を込めて、当館ホームページに「図書館の移転・建築に関わった方々」というページをつくり、お名前と一言を公開している²⁸⁾。当たり前のことだが、全員が、それぞれの立場で職責を全うし、当館はつくられた。できてしまえばその働きのほとんどは目に見えなくなる。惜しいくらい、注がれたパワーは膨大だ。

6.2 発注者が熱を持って牽引する

本プロジェクトでは、複合化や民間委託などの革新的な取り組みをしているわけではない。単体で直営の県立図書館の整備を、地方自治の制度の下、議決という合意形成を経て実現するという、定められた手続きに基づいて行ったものである。

ただ特筆すべきは、その過程において、関係各位との地道で丁寧な調整を愚直に積み重ねる「場づくり」を行ったことだろう。自治体が自らプロジェクトに希望をもち、可能性を矮小化せず、おのおの力が最大限の効果を発揮するよう力を尽くした。その意思とチームワークがあれば、どの自治体も、たとえ既存の制度の下であっても凡庸に陥ることなく、社会に歓迎される公共図書館を生み出すことは可能だ。

石川県立図書館条例を定め、図書館の所管を教育委員会から知事部局への移管し、文化施設に位置づけた。他の部局や関係団体との連携がより柔軟に、機動的にできるようになり、図書館の潜在的な可能性を引き出す契機となった。多彩な展示

やイベントを実施し、来館者の裾野が拡大した。

また、運営ルールを抜本的に見直し、館内での会話を許容し、閲覧エリアでも蓋付きの飲み物であれば持ち込めるようにした。来館者が気楽に滞在しやすくなったことで、老若男女問わず、さまざまな層が訪れるようになった。苦難を乗り越え、これらの実現に尽力した同僚たちの貢献に、敬意を表したい。

地域に根を張り、長い視座に立つ自治体の主体的で前向きな駆動は、公共建築の可能性を引き上げるために不可欠だ。全体を把握し、質を高めるように差配できるのは、発注者の立場でなければならない。もっとこの部分は、語られてよい気がする。

6.3 複合化／単館・民間委託／直営

近年の公共施設の整備では、同じ建物の中に、図書館があり、隣に博物館や交流施設があるような、機能を複合させることも増えている。上述したように、当館は、そのような複合施設ではなく、図書館という単一の用途で、いろんな「知」や「体験」のあり方を追求した施設だ。運営も県の直営である。民間委託や複合化といった新しい手法に頼るのも、避けられない時代の流れなのかもしれない。しかし、それらはまだ特殊解であり、多くの自治体では圧倒的にこのオーソドックスな整備の手法が選択される。それに、もう可能性はないのか。そんなことはない。それを示したかった。

直営の単一機能であれば、施設のトップも館長の一人で、意思決定や指示系統もシンプルだ。図書館が元来持つ可能性を大いに解放するだけでも、まだまだできることはある。

7 結び

本稿で述べた、現場で数々の大きなテーマにぶつかりつつ、私が見出したことは、一般論になり得ない。本プロジェクトのために集った「役者たち」の得意なところを私なりに理解し、おのおのが本領を発揮してもらえるように、そのときにベストだと思った「歯車の組み合わせ」であり、ひとつの道でしかない。役者が変われば、全く別の形の図書館が出来ていただろう。十人十色の「ベストな形」がある。だからこそ、建築は面白い。

開館して以来、建築やデザインの関係者もさることながら、むしろ、本が好きな来館者からの反響が大きい。建築に興味がなかった来館者が感嘆していることも珍しくない。安堵とともに、それがとてもうれしい。

図書館とは。現場が最も忙しいときの私の手帳に、「他者と出会い、世界を解釈する場」と書きなぐったことがある²⁹⁾。本は、時空を超えてこの世界の素晴らしさを教えてくれる。どんな図書館を後世に残すか。自分が担っているミッションは大きい。手は抜けない。現場に立ち続け、自らを鼓舞した。

当館を訪れた人が帰るとき、「本って素晴らしい」としみじみ思う図書館にしたかった。ブリッジの真ん中に立ち、360度本に包まれると、これまで人類が考え、表現してきたことの物量に圧倒される。人類の活動の集積が、ここにある。この先、悩むことがあっても、同じような悩みをもち、乗り越えた話も、この中にはきっとある。巨人の肩に乗れる。そう思うと気が楽になる。しかも、だれにでも開かれ、入館料もとられない。図書館は、公共建築の中でも特別な存在だ。

開館までの6年半で、私が調整した項目は1万項目くらいになるろうか。途中、心が折れそうなくらいたいへんな時期もあった。振り回されたり、板挟みになったり。思いどおりにいかないことも常に起こる。標準形の単純な形状だったらどんなに楽だったか。消極的になることもあった。

開館から1年経ち、ひとまず、目標の100万人の来館者は達成した。来館者おのものが、気ままにお気に入りの場所で寛いだり、談笑したり、勉強したり、読書にふけったりしている。窓辺の席はいつも満席だ。思い描いていた風景が眼の前に広がっている。「ここに住みたい」と褒めてもらうこともある。やはり、標準形をつくらなくて、よかった。

調整役の担当者は、大きな決断に直接は関与できない。眼の前の小さな検討事項に一つ一つ向き合い、関係者の合意を得て一步ずつ進めるしかない。しかし、「小さな団扇」だけは持っている。小さくとも、何度も振りつづけていれば、風向きを変えられるし、さざ波も起きる。担当者が動かなければ、実務は動かない。

私と同じような調整役を担う若い職員が本稿を読んでいるとしたら、伝えたい。どうか縮こまらず、めいっぱい想像力を働かせて、そのプロジェクトが持っている可能性を最大限追求してほしい。まだ見ぬ来館者がどれだけ楽しむか、あなたの双肩にかかっている。「ことなかれ」で済ますことは簡単だ。しかし、そうするのは実に惜しい。建築は、一人の職業人生よりも、長く残る。そして建築は、正直だ。志の高さ、手を動かした跡、すべてが現れる。がんばった分だけ、建築は生命力を持つ。つくる間に、信頼できる仲間もできる。心強いプロフェッショナルたちも、支えてくれるようになる。完成したとき、彼らと大きな喜びを分かち合うことができる。その後もずっと、「あのときは、たいへんだった」と盛り上がる。来館者の笑顔に触れ、生きていてよかったと思える。苦労は、必ず報われる。だから、つくる仕事はやめられない。

Uターンを決心して地方公務員になり、偶然、全身全霊で向き合えるこの仕事³⁰⁾に出会えたことは幸運だった。助けてくれた同僚たち、尽力してくれた関係者の全員に、心から感謝したい。一緒に働けたことを誇りに思う。

公共図書館はまだまだ可能性に満ちている。本稿で少しでもそれが伝わったら本望だ。当館が、一人でも多くの石川県民の人生に寄り添い、この地で暮らすことへの愛着を育む施設になることを願いつつ、私も人生の晩年、ここで毎日過ごすことを楽しみにしている。

[捕足・註釈]

- 1) この間に辞令は何枚ももらい、配属先はいろいろ変わったが、「石川県県民文化スポーツ部文化振興課新図書館整備推進室兼土木部営繕課」が文字数も期間も一番長かった。設計（プロポーザルを含む）から工事をしていた期間にあたる。なお、令和5年度4月に異動し、現在は生活環境部自然環境課に配属されている。
- 2) 大学卒業後、安藤忠雄建築研究所、A.T.カーニー株式会社、ウォルト・ディズニー・ジャパン株式会社を経て平成26年入庁。
- 3) 石川県立図書館 <https://www.library.pref.ishikawa.lg.jp/>
- 4) 建築関連の雑誌では『新建築』（2022年7月号）、『日経アーキテクチャー』（2022年10月13日号）、『ディテール』（No.236 2023年4月号）、『近代建築』（2022年10号）等に掲載されている。
- 5) 図書館の外装は特徴的でも、内部は何の変哲もない四角い箱を堅持するという例が典型だ。
- 6) 当館の整備の過程では、いわゆるワークショップは開催していない。機運醸成の側面もあるだろうから、ワークショップにも一定の意義はあろう。ただ、県の規模で、県民全体の意見が参加者の自由な意見によってバランスよく代弁されることはありえないし、そもそも未来の県民は参加できない。設計者側が自らの意向を都合よく通すための「アリバイづくり」に利用しているように感じる例もあり、ワークショップへの過度な依存には疑問がある。結局は、施設に対して責任を持つ主体である発注者が、まだ見ぬ来館者に対してめいばい想像力を働かせることが最も重要だと考える。
- 7) できることがあったとしても、それは端折っただけだ。整備の過程で省かれたコミュニケーションは、完成後、運営に支障をきたし、必ず副作用が起きる。
- 8) コロナ禍の影響を受ける2019年まで、CDなどのオーディオレコード市場は落ち込みを見せる一方で*、ライブ・エンターテインメント市場は拡大を続けていた**。この傾向は世界の音楽市場を牽引するアメリカにおいても同様だ***。
*一般社団法人日本レコード協会(2022)、統計情報年次推移「生産実績 過去10年間 オーディオレコード全体」
**ぴあ総研(2022)、「ライブ・エンターテインメント市場規模推移予測」
***Million Insights(2022)、Music Events Tickets Market Size, Share & Trends Analysis Report By Type (Digital Tickets, Online Printable Tickets, Paper Tickets), By Region (North America, Europe, APAC, CSA, MEA), And Segment Forecasts, 2021 - 2028
- 9) 日本図書館協会. 日本の図書館：統計と名簿2021. 2022, p. 29.
https://www.jla.or.jp/Portals/0/data/iinkai/chosa/2022pub_keinen.pdf
- 10) 視察先でご対応いただいた皆様に心より感謝申し上げます。
- 11) 「溝」が生まれるかどうかは、設計者の技術者としての力量よりも、担当者のコミュニケーションがいかに誠実で丁寧であるか、その姿勢にかかっている。発注者の要望を無視するのは論外として、はじめから理念や理想を押し付け、信頼関係を築くに至らないこともしばしばあるようだ。図書館は「図書館の自由に関する宣言」にあるとおり、あらゆる思想や考え方を受け止める施設だから、そのような姿勢で臨んでは、コミュニケーションは成功しない。まず小さな項目を丁寧に処理し、地道に信頼を築くべきだ。そうすれば、やがて理念も通じるであろう。
- 12) 川島隆徳・渡邊由利子(2000)、図書館に関する意識：2014年、2019年の調査結果から国立国会図書館 E2225 <https://current.ndl.go.jp/e2225>
- 13) 石川県立図書館基本構想のP11に、施設のあり方を「さまざまな動詞」で記述した。
<https://www.library.pref.ishikawa.lg.jp/file/3260.pdf>
- 14) 本稿では、基本的に「書架」とは言わず、一般的にも分かりやすい「本棚」という言葉で統一する。ただし、円形書架、段状書架等は、これまで対外的に用いてきた用語であるため、そのまま用いる。
- 15) 打合せで、関係者双方に意見の対立が出たとき、中立的立場を基本とする調整役として心がけていたのは、意見の内容を客観的な機能の言語に落としこむことだ。定性的な美学・哲学は受け付けない（それに良し悪しはないし、踏み込んだとしても折り合いがつくことはない）。定量的な分析は、お互いを冷静にし、許容しやすい。
- 16) 当館の本棚の1段の高さは、長い調整の末、319.5mmで決着した。
- 17) 現代でも「多目的スペース」や「フリースペース」という部屋名もあるが、似て非なるものだ。特定の機能を設けないことが自由を担保するという「一対一」対応への盲目的な思い込みがある。

それらのスペースには、手持ち無沙汰に椅子が並べられるのが関の山で、行為を誘発している例を私は知らない。別の目的があって、それに付随する「余白」なのではなく、何も生まれない「空白」なのだ。広場が賑わうのも、道路の一部である場合だ。街の中を移動する動線と結びついた余白であるからこそ、人は集い、佇む。

- 18) プロポーザル時の提案は設計者選定のためのものとして、設計の検討は契約後、ゼロベースで行った。このほか、設計段階で都度、アドバイザー（香山壽夫東京大学名誉教授、植松貞夫筑波大学名誉教授、竺覚暁前金沢工業大学ライブラリセンター館長、田村俊作慶應義塾大学名誉教授）らによる検証も実施し、第三者の見地からの意見も踏まえ、案を鍛えた。特に、実施設計の初期に、川上元美氏も同席のもと、窓辺の空間のポテンシャルについて指摘がなされたことは、当館にとって大きなメルクマールであった。
- 19) 当館の円形書架は、900mmスパンの方形の本棚が多角形に並んだもので、曲面は用いていない。棚の高さが変えられることはもちろん、面展示への切り替えも自由にできる。モックアップを製作し、検証を重ねて作り込んだ。
- 20) 私の卒業論文の研究はまさに、都市における外観デザインの決定について、内部空間の豊かさと外観としてのデザインの相克がテーマであった。（「都市における単位空間とファサードについて」(2003),東京大学工学部建築学科)
- 21) 閲覧エリアでは人が動く。対照的に、デジタルアートの部屋「ブックリウム」では、大きなスクリーンに投影された本の画像が、興味に応じて星団のように集まってくる。
- 22) 鶏が先か、卵が先か。オーケストラ・アンサンブル金沢が、実際に円形空間でミニ・コンサートを実施し、盛況を博した。
- 23) 防火区画の役割も果たしている。
- 24) あるいは、契約はないが、老婆心からデザイナーが継続的に無償で関与している例も珍しくないとくく。この構造的課題は、改善するべきだと考える。
この件は、国土交通省が作成した「都市機能施設の効果的な整備・運営に向けた手引き(2023年6月)」における座談会(P32)においても強調した点だ。
- 25) 嘉門佳顕・川上元美(2023)「百脚繚乱」の閲覧席―石川県立図書館の家具について― 図書館雑誌2023.3 日本図書館協会
石川県立図書館家具ガイド(2022)：<https://www.library.pref.ishikawa.lg.jp/file/2246.pdf>
- 26) 改修の際は、建築よりもこれらに予算を割くことを優先するべきだと訴えたい。
- 27) トータルメディア開発研究所 石川県立図書館プロジェクトインタビュー：
<https://www.totalmedia.co.jp/info/interview-0004-ishikawaken-library/>
- 28) 石川県立図書館の移転・建築に関わった方々：
<https://www.library.pref.ishikawa.lg.jp/category/aboutlibrary/2147.html>
- 29) 『建築雑誌』2023年2月号「インスピレーションの起源」で私の手帳の当該ページが公開されるという珍事が起きた。
- 30) 卒業設計は「漸進的公共体」というタイトルだった。あのころから、図書館も含む多機能で複合的な公共空間のありようを探究していた。

石川県立図書館のリニューアルオープンについて

石川県県民文化スポーツ部文化振興課・嘉門佳顕（かもんよしたか）

新しい石川県立図書館（以下「当館」）は、金沢市小立野の地に移転し、2022年7月に開館した。基本構想策定以来、6年間にわたり石川県県民文化スポーツ部文化振興課で整備に従事してきた身として、大事にしてきたことを振り返りつつ、当館の紹介としたい。

●石川県立図書館概要

当館は、旧館の老朽化・狭隘化により、兼六園から南東に約2キロの位置にある、かつての金沢大学工学部跡地に新築された。金沢市による金沢美術工芸大学の新キャンパスの工事も向かいの敷地で進んでいる。

当館は、美術館や博物館と同じく当課所管の文化施設である。建物は地上4階・地下1階建て、延床面積約2万2,700平方メートルで、周りを広場や緑地、約400台分の駐車場が囲む。開架は約30万冊、書庫の収蔵能力は約200万冊、閲覧席数は約500席の規模である。閲覧エリアのほか、研修室やラーニングスペース、モノづくりや食文化を体験する部屋などを備えた文化交流エリアがあり、様々な知的活動を展開できる。

●思いもよらない本との出会い

当初から一貫して「多くの人を訪れる図書館」を目指した。国立国会図書館（NDL）による調査結果によると、年に1回以上公共図書館を利用する人の割合は約4割だという。一方、デンマークは約6割である。「4割の壁」を超え、裾野の広い公共性を獲得したい。そのために、「思いもよらない本との出会い」をコンセプトの中心に据えた。「ここに来る」からこそその発見があり、新たな好奇心が刺激される。いわゆる「セレンディピティ（serendipity）」に溢れる図書館だ。

●円形の大空間

内部は円形劇場のような、開放的かつ立体的な空間である。人びとが集う建築において、円形の平面は古くから用いられてきた歴史ある形式だ。円は中心を持ち、場を一つにする。蔵書を一望する体験は心に残り、永続的な象徴性を持つ。孤を描く通路は、人を誘い、動きを生む。

当館では円形の本棚が、中心の吹抜けの周囲を年輪のように何重も並ぶ。本棚間は円弧形の通路で、いわば散策路だ。

●本を愛でる動と静の閲覧空間

円形書架の大空間は人びとが行き交い、三々五々過ごす街のような界限性がある。歩きながら本の表紙が次々目に飛び込んでくる。友人と談笑し、気になった本を手にする。

一方、窓辺は書斎のような静けさが漂う。外壁パネルは列柱がつくる矩形の輪郭からはみ出し、外にむかってめくれるように並ぶ。そこにできる三角形の余白が風景を眺める個席となっている。動と静、いずれの空間も本を愛でることに供し、「ここに来る」体験を豊かにする。

●本と出会う12のテーマ

普段は本を読まない層も、ふと読みたくなる一冊を見つけるきっかけをつくりたい。今回、「本と出会う12のテーマ」という独自の分類を新設し、円形書架に並ぶ7万冊は同分類に基づいて配架した。12のテーマは「好奇心を抱く」、「世界に飛び出す」、「暮らしを広げる」など、身近で親しみやすい分類で構成され、細分化された小分類は約700に及ぶ。

さらに、1階の中心部には各テーマを代表する本を集めた「本との出会いの窓」のコーナーがある。スロープ沿いに装飾を施した本のショーケースが並ぶ。ウィンドウショッピングのように本の世界へと誘う小径だ。

●本との時間を彩る「百脚繚乱」の閲覧席

当館利用推進課長の小石宗明は、整備の過程において北欧の図書館30館を視察した。その報告書によれば、日本と北欧で最も差を感じた点の一つが「閲覧席へのこだわり」だという。北欧の図書館には、多種多様で「ここにいたい」と思わせる魅力的な閲覧席がある。当館も見習うべく、家具全般のデザイン・監修をデザイナーの川上元美氏に依頼した。品があり、居心地のよい「オーセンティックな環境づくり」を主眼に置き、100種を超える閲覧席を館内随所に設けた。一人になりたいとき、友人と語りたいとき、集中したいとき、くつろぎたいとき。その日の気分を、多彩な椅子が受けとめる。

●魅力を高める地道な調整

ほかにも、工夫したことは多々ある。感覚を刺激し、知の探究へと誘うサイン。各エリアの視認性を高める加賀五彩を活用した色調の統一。来館者自身で図書検索・貸出手続等を行う「セルフステーション」の製作。サービス全般を支える利便性の高いシステムの構築。いずれも、垣根を超えた関係者間の調整なくして実現できなかったものだ。

機能性、意匠性、維持・管理のしやすさ、経済効率性。すべて重要であるが、立場によって優先することは異なる。整備の過程では、理想と現実のはざまで、トレードオフの関係にある課題が次々とする。あきらめず、合意形成を図るよう対話を重ね、一つ一つ打開策を検討した。

当館が、訪れる度に細部に宿る小さな工夫を発見できるような、奥行きのある魅力を備えているとしたら、関係者が互いに想像力をはたらかせ、各局面において突破口を見出していった地道な努力の賜物である。

●「おおやけ」としての図書館

今日、あらゆる情報がデジタル化され、仮想現実へのシフトも進む。COVID-19の広がりとは人と人との距離を遠ざけた。図書館が不要になるという声もある。それに筆者は異を唱えたい。公共図書館の数は、この30年で1.7倍になり、増加の一途をたどる。図書館はこれからも期待され、可能性に満ちている。それを実感できる図書館をつくる一心で尽力した6年間だった。

開館して2か月弱で、25万人を超える来館者が訪れた。「図書館の概念が変わった」という声も多い。「美術館みたい」や「大樹の下のように」など、さまざまな言葉で譬えられている。

中でも、「何時間も過ごせる」や「ここに住みたい」という声が印象的だ。公共の「公＝おおやけ」はもともと「大家＝おおや」が語源であるといわれている。当館が、一人でも多くの人にとって、何度も足を運びたくなり、心地がよく、前向きになれる「大きな家」として、生涯寄り添う施設になっていれば本望だ。

Ref:

石川県立図書館.

<https://www.library.pref.ishikawa.lg.jp/>

Seismonaut; Roskilde Central Library. The Impact of Public Libraries in Denmark: A Haven in Our Community, 2021, 62p.

https://www.roskildebib.dk/sites/roskilde.ddbcms.dk/files/files/news/roskildebib_folkebibliotekets_betydning_for_borgerne_i_danmark_eng_final_0.pdf

“本と出会う12のテーマ”. 石川県立図書館.

<https://www.library.pref.ishikawa.lg.jp/category/facilityguide/1040.html>

小石宗明. 図書館大国が集う北欧を訪ねて: 石川県立図書館の新たな船出に向けたヒントを探す旅. 石川県民文化スポーツ部文化振興課新図書館整備推進室, 2019, 179p.

石川県. 石川県立図書館家具ガイド. 30p.

<https://www.library.pref.ishikawa.lg.jp/file/2246.pdf><https://www.library.pref.ishikawa.lg.jp/file/2246.pdf>

石川県民交流課広報室広報グループ. ほっと石川. 2022, 2022夏季号, 15p.

https://www.pref.ishikawa.lg.jp/kenmin/kouhou/documents/hot_up_2022kaki.pdf

日本図書館協会. 日本の図書館: 統計と名簿2021. 2022, p. 29.

https://www.jla.or.jp/Portals/0/data/iinkai/chosa/2022pub_keinen.pdf

安永寿延. 日本における「公」と「私」. 日本経済新聞社, 1976, 174p.

川島隆徳, 渡邊由利子. 図書館に関する意識: 2014年, 2019年の調査結果から. カレントアウェアネス-E. 2020, (384), E2225.

<https://current.ndl.go.jp/e2225>